

第IV部 平和貢献の具体的なモデル

1. モデルを想定した具体的な平和貢献策の検討

ひろしま平和貢献構想では、平和を 記憶する、 発信する、 支援する、という3つの理念を挙げ、これらを具体化するための6つのプロジェクト案を掲げてきた。ここではそれらを実行に移していく手がかりを得るため、モデルに即してさらに具体的な平和貢献への取り組みを検討することとする。その場合、広島にもっともふさわしい平和貢献として、「紛争終結地域の復興支援」をテーマとして取りあげたい。その理由は、第一に21世紀の課題として極めて重要であるからであり、第二に広島の経験を最もよく活かせる分野だからである。

「紛争終結地域の復興」は21世紀の課題

21世紀の世界が直面している課題の中でも、最も緊急かつ重要なものに挙げられるのが、紛争終結地域における復興であろう。

民族対立に根ざした内戦や紛争、あるいは空爆や地上戦などで、町が焼かれ、大勢の一般市民が犠牲となった紛争終結地域は、独力での復興は困難で、さまざまな外からの支援を必要とし、かつそれなしでは、さらなる内戦の勃発などにより犠牲が予想される。

ここ数年だけを見ても、インドネシアから独立した東チモール、タリバン政権が崩壊したアフガニスタンをはじめ、民族対立から虐殺を経験したルワンダなどのアフリカ諸国、あるいは旧ユーゴスラビアなど、いずれも世界の周辺地域でこの問題が発生している。米英軍により主要都市が制圧され、フセイン政権が崩壊したイラクの復興も早急な課題となるだろう。

広島を経験を生かす

広島が21世紀においても、引き続き世界の平和への貢献をめざすなら、「紛争終結地域の復興」こそ、その経験を生かせるのではないか。なぜなら世界の大半の紛争終結地域は、手段こそ核兵器によるものではないが、大規模な破壊や虐殺を経験しており、人類的視点からの戦争の否定に共鳴し、立ち上がるためには憎しみの克服や、心の傷の癒し、明日への希望を必要としている。そしてそれらはいずれも、広島がかつて経験しているものだからである。

2. カンボジアをモデルとした平和貢献のあり方

(1) 復興支援に地域コミュニティが果たす役割とモデル地域像

紛争終結地域の復興支援の担い手は、国家や国際機関、NGOなどさまざまだが、前節で述べたように、自治体とその住民からなる広島のような「地域コミュニティ」が果たすべき役割も少なくない。国家レベルの支援と異なり、小規模だが「確実かつ有効」な支援を目指すことが求められる。

この確実性・有効性のためには、対象地域としていくつかの条件が必要だろう。まず、武力紛争が終結し、最低限の安全性が保たれていること。次に、現地の地理的条件や気候、文化、習慣、言語、行動様式などが日本と著しくかけ離れていないこと。歴史的な反日感情や敵対感情がないことも重要だ。その上で、広島からの支援に対するニーズがあり、かつそれに見合うだけの人的・物的・技術的資源を広島が持っていることも必要である。

それらを前提として、現在の世界の紛争終結地域を見た時、地理的に近く、文化的にも同じアジアの仏教圏に位置し、反日感情がなく、武力紛争はほぼ完全に収束し、かつ復興のためのニーズを数多く抱えた地域として真っ先に考えられるのが、カンボジアである。

1991年のパリ和平会議や1992～93年の国連平和維持活動（UNTAC）をはじめ、1993年の総選挙実施以来、今日まで日本はカンボジアの復興に積極的な役割を果たしてきた。UNTACの活動から10年を経て、議会政治と民主主義に基づく新生カンボジア王国の復興はようやく軌道に乗り始めているが、本当の意味での民生の安定はこれからの課題だ。国家レベルの巨大支援プロジェクトに加え、地域レベルの等身大のさまざまな支援が求められている。

そうした中、広島からは1994年のアジア大会開催がきっかけで、すでに市民レベルで「カンボジアひろしまハウス」などの支援交流が始まっている。原爆で多くの命を奪われた広島と、ポル・ポト派政権による虐殺や地雷の後遺症にあえぐカンボジア。両者をつなぐ糸は決して細くない。

(2) カンボジアの復興課題

UNTAC による総選挙実施と新生国家成立から 10 年を経たカンボジアは、さまざまな復興課題に直面している。そのうち、「ひろしま発」の支援の対象になりうる主要なものを挙げてみよう。

教育

- 農村部における初等・中等教育の充実
- 農村部における教員の確保
- 大学・高等教育機関の拡充
- 外国語教育の充実，留学機会の提供
- 農村部の成人・女性教育の充実

福祉・厚生

- 地雷被害者への義足製作支援
- 車椅子三輪車の製作・提供
- 地雷撤去活動への支援
- 孤児・エイズ孤児対策
- 貧困家庭の身売り対策

医療・公衆衛生

- 飲料水の確保
- 医療機関，医師，医療スタッフの確保と充実
- 農村部における公衆衛生指導
- エイズ対策

産業・職業訓練

- 農村部における農業技術指導
- 中等教育終了者への職業訓練の提供
- 職業訓練機関の拡充

文化・芸術

- 伝統文化・工芸・芸術の復活，継承

(3) 広島からの復興支援活動のプロセス

「ひろしま発」の支援を開始するにあたっては、プノンペンおよび地方の活動拠点づくり、パートナー組織および協力者の発掘、着手すべき復興支援事業および実施地域の選定、長期的な実施計画の作成、現地スタッフ（日本人およびカンボジア人）の確保などが必要となる。プノンペンにおける拠点としては、現在市民グループにより建設中の「カンボジアひろしまハウス」が最も実現可能性が高い。また地方における拠点の一つとしては、ポイペットの「カンボジアこどもの家」（代表・栗本英世氏）をパートナー組織とし、連携しながら運営していくことが考えられる。

当面、着手可能な事業について、まとめてみる。

カンボジアで支援活動中のNGOおよび個人に関するリサーチ、および連携可能なパートナー組織および個人の発掘、ネットワーク化
プノンペンにおける活動拠点としての「カンボジアひろしまハウス」の建設および運営事業作成支援

例)

<カンボジア人対象事業>

- カンボジア人を対象にした日本語教室
- 日本留学希望者への支援
- 日本研究者への支援

<日本人対象事業>

- プノンペン在住日本人への交流の場提供
- 日本からのセミナー・ツアー受け入れ
- 日本人留学生への支援



写真 現在日本語教室で使われている世界共通の教科書。カンボジアに適した教科書作りも望まれている。

着手可能な復興支援課題の選択と実施

例)

ポイペットの「カンボジアこどもの家」（栗本英世氏代表）を通じた支援

- 小学校運営
- 井戸堀
- エイズ孤児支援

シエムリアップにおける古典芸術・芸能復興支援

- 影絵
- 古典舞踊教室
- アンコールワット修復活動支援
- 伝統的手法による織物製作支援
- エイズ孤児収容施設建設・運営支援
- 日本人医療スタッフによる農村部定期巡回医療相談

(水本和実)



写真 ポイペット「カンボジアこどもの家」が村人と共同で建設，運営にあたっている学校「寺子屋」(左)。 / そこで学ぶ子ども達(右)。



写真 (左) カンボジア特産の黄色い生糸による手紡ぎ，手染め，手織りの伝統的織物の復興プロジェクト / (右) 子どもによる影絵のための伴奏音楽の練習風景(いずれもシエムリアップ)

3. カンボジアでの具体的な活動拠点整備と事業例

(1) 「ひろしまハウス」をモデルとした活動拠点整備と事業例

- * カンボジアの首都、プノンペンのウナローム寺院の境内に建設途中の「ひろしまハウス」は、現在未完成の状態であるが、完成すればカンボジア、プノンペンにおける全ての復興支援活動の拠点となる可能性が高く、建設及び運営に関して連携しながら進めていくことも考えられる。

「ひろしまハウスとは」

1994年の広島アジア競技大会が開かれた際、選手を送り出すのが困難であった、カンボジアの選手を日本に迎えるために、広島市民がひろしま・カンボジア市民交流会としてカンボジア選手を物心両面にわたって支援。それが縁で大会終了後、カンボジアの首都プノンペンにあるウナローム寺院の僧であった渋井修さんの協力で、寺院の境内に「ひろしまハウス」の建設の話が持ち上がった。

また1996年春、広島市主催の市民講座「未来大学」で早稲田大学石山修武氏がまちづくりについて講演したのが縁で、ひろしま・カンボジア市民交流会の国近代表が石山氏に「ひろしまハウス」の設計を依頼。石山研究室がボランティアで設計を担当した。

「ひろしまハウス」は、原爆によって壊滅した広島を、内戦やポル・ポト派による虐殺にさらされたカンボジアの人に知ってもらい、また職や家、親を失った多くの人々がそこで暮らしながら学べるという場所を提供する。記念文庫、宿泊所、医療施設、孤児院などが計画された。

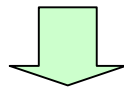
建設資金は募金でまかなわれており、工事は募金が集まれば工事を進めるという「積み上げ方式」でおこなっている。



写真 プノンペンのウナローム寺院内に建設中の「ひろしまハウス」

カンボジアで支援活動中のNGOおよび個人に関するリサーチと、連携可能なパートナー組織及び個人の発掘，ネットワーク化機能（現地とのパイプづくり機能）整備

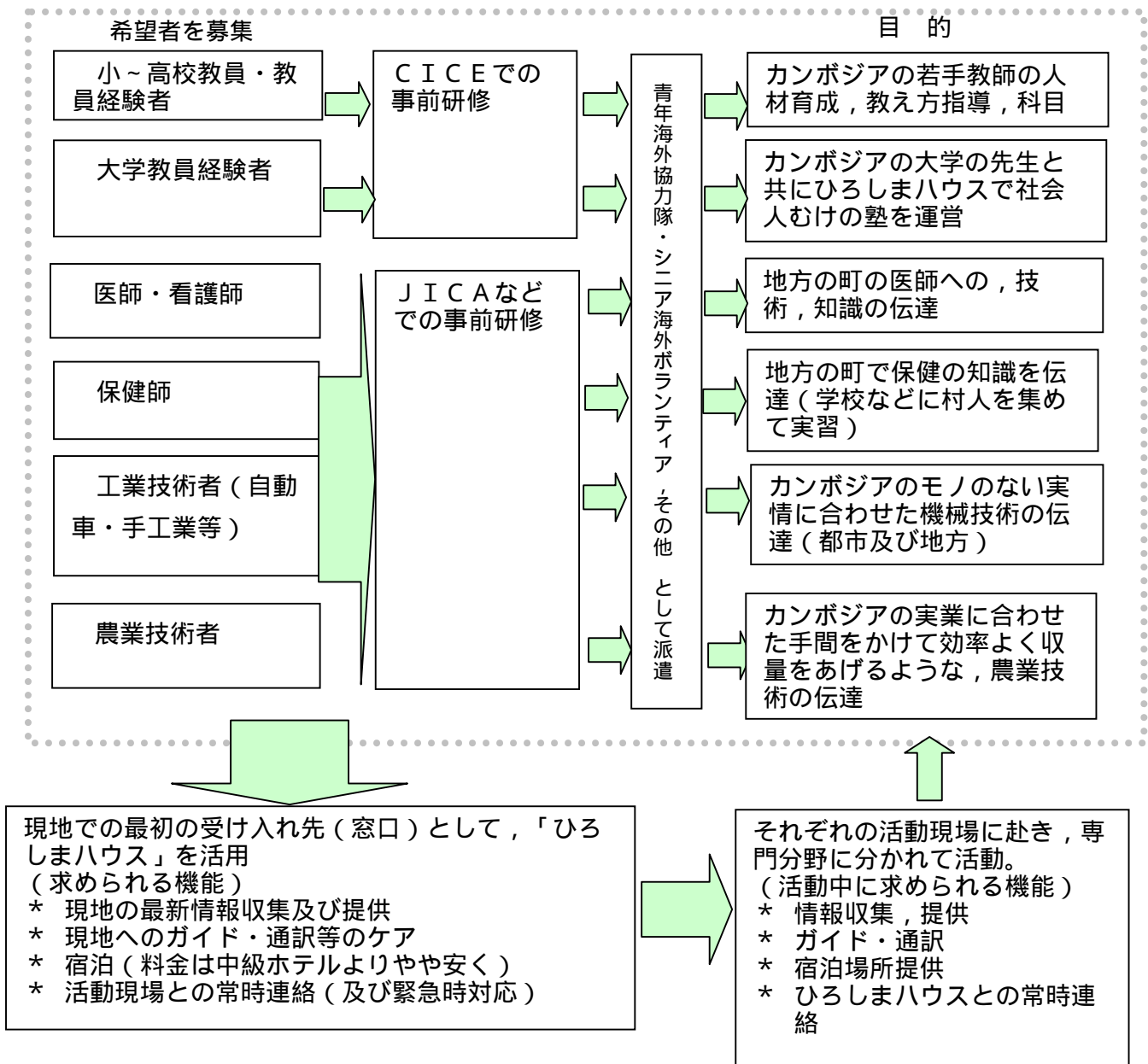
- 支援活動をはじめる際の足がかりとして、まず既にカンボジアで活動しているNGOや個人を洗い出し、連携・協力の可能性のある人たちとネットワーク化していかななくてはならず、ひろしまハウスはその拠点になりえる。
- また、現地の人に信頼される活動を積み重ねて行き、その実績を残し、ひろしまハウスの趣旨を汲んで活動に参加してくれるような、信頼しあえる人材を現地に育てていく。



- 現地のニーズ把握，様々な情報把握を実施
- 活動を行う際の政府関係者，地元組織，一般の現地人等に信頼され，パイプ役となる人材を確保する。

広島からの派遣人材の受け入れ、活動補助機能整備

- 教育県，産業都市，農業・林業県など，広島には様々な「顔」がある。そのような広島を支えてきた，多様な産業や教育現場の人材の経験，知識，技術は，紛争終結国における復興支援の現場でも充分活かすことができると考えられる。
- ここでは，ひろしまハウスを活用した，教員，医師，看護師，保健師，工業技術者，農業技術者の人材派遣と復興支援活動のありかたを提案する。



交流と啓発を目的とした宿泊・研修機能（カンボジア復興支援を知るスタディーツアー機能）整備

a) 一般・学生向けスタディーツアー

- 広島大学などに、カンボジアで支援活動をしているNGO関係者を呼び、広く一般に呼びかけた上で、現地の状況や活動内容についての報告会をしてもらい、カンボジアの復興支援に興味をもつ学生や一般の人を広く公募して、復興支援現場やNGOの活動拠点を視察したり、活動を手助けするツアーを企画したりする。
- その際、プノンペンの宿泊場所、現地人との交流、広島の活動を知る場所としてひろしまハウスを活用する。

b) 子供（小・中学生）向け交流ツアー

- カンボジアで支援を受けている小中学校の子供達と、広島県内の子供達の間で絵や手紙などの交換による交流を行い、知り合う。
- 知り合った子供達のうちの有志が、夏休みなどを利用してカンボジアの子供達を訪問するツアーを企画する。
- その際のカンボジアの子供と広島の子供が交流し、いっしょに宿泊する場としてひろしまハウスを活用する。

なお、どちらのスタディーツアーの企画も、ひろしまハウスを運営するNGOが行い、ツアー代金の一部をひろしまハウスの運営費に充て、自主財源の確保を行うことが考えられる。

塾の機能整備

日本（広島）から派遣された大学の先生と、カンボジアの大学の先生が協働して語学、社会情勢などについて学べる社会人向けの塾を運営する。

NGOへの事務所貸し（インキュベーションオフィスの提供）機能整備

これからカンボジアで活動を開始しようという地元NGOの事務所開設支援として、期限を設けて事務所を安く提供する。

ひろしまハウスで育ったカンボジア人の起業支援にもつながる。